

南琉球宮古伊良部島方言のm語尾終止形の機能

下地, 理則

<https://hdl.handle.net/2324/7342416>

出版情報：琉球の方言．34, pp.193-208, 2010-03-31．法政大学沖縄文化研究所
バージョン：
権利関係：



南琉球宮古伊良部島方言のm語尾終止形の機能

下 地 理 則

1. はじめに

本稿は、南琉球宮古伊良部島方言の文末終止の動詞形式の1つであるm語尾終止形（内間1985）の機能を記述することを目的とする¹。m語尾終止形は以下の(1)の下線部に見るように語の末尾に-m（グロスはM）を取る動詞形式である。

- (1) A : *kuri=a* *nau=mai* *ssa-n-Ø=dara=i*
 3 SG=TOP 何=も 知る-NEG-NPST=でしょ=ね
 「こいつは何も知らないでしょ。」
- B : *nau!* *kuri=a* *nau=ju=mai* *ssi+u-Ø-m*
 何 3 SG=TOP 何=ACC=も 知る+PROG-NPST-M
 「まさか！この人は何でも知ってるよ。」

本稿では、自然談話資料をデータに用いて、m語尾終止形が以下の2つの機能を持つと指摘する。

- **話者の確信**：話者が命題内容の成立（真）あるいは非成立（偽）について、なんらかの証拠（直接体験、信頼のおけるソースからの伝聞、類推など）をもとに確信を持っていることを表わす。
 - **聞き手にとっての新情報**：聞き手が命題内容の成立あるいは非成立についてなんの情報も持たない場合、あるいは間違った情報を持っている場合に、正しい情報を提供する。
- 例えば(1)では、Bが「この人が何でも知っていること」という命題内容の成立に確信を持っており、かつ、聞き手Aが間違った前提に立っているので正しい情報で訂正している。m語尾終止形は、このように、m語尾終止形は話者の確信と聞き手にとっての新情報を同時に標示している。

2. 先行研究の整理

宮古語には、文末終止の形式として意味的によく似た2つの形式がある。ひとつは連体終止形（伝統的には終止形ないし終止形1）であり、もうひとつは、連体終止形に-mが付属したような形であるm語尾終止形（伝統的には終止形2）である²。

- (2) *miir* 「見る」 (連体終止形)
- (3) *miir-m* 「見る」 (m語尾終止形)

m語尾終止形の形そのものについては、特に歴史言語学的観点から多くの研究で注目されてきている (仲宗根1961; 本永1976; 内間1984; 中本1990; 狩俣1999; その他多数)。内間 (1984) や名嘉真 (1992) によると、*-m*は推量の付属語*=*mu*ないし*=*mo*に再構できるといふ。

一方、m語尾終止形の共時的な記述については、あまり研究が進んでいないようである。そもそも、m語尾終止形を持っている方言が北部方言に限られ、使用頻度も少なく、これまで知られている方言を見る限り非過去形に限られるという指摘がある (狩俣1997)。よって、調査自体が難しかったと想像される。m語尾があると言われてきた池間方言でさえ、近年の調査によると「それらしい痕跡が認められる程度」であるという (林2007: 45)。m語尾終止形は宮古語においては「危機表現」(endangered morphosyntax) と呼べるものであり、取り組む優先順位が高いと言えるだろう。

m語尾終止形の機能については少数ながら言及があり、それらの共通見解として、「話者の主観的な判断」「強調」を表すという (平山・大島・中本1967; 名嘉真1992; 伊豆山2002)。しかし、実例をもとにした詳細かつ説得力のある分析はまだ示されていない。

m語尾終止形の機能の解明のうえで、伊良部島方言は重要な方言である。というのも、この方言ではm語尾終止形が生産的に使われ、かつ過去形にもこの形式が見られるからである。本稿では、自然談話資料をもとに、伊良部島方言のm語尾終止形の機能を詳細に記述することを目指す。

3. 動詞屈折形態論

3.1. 屈折パラダイム (語形変化の一覧)

伊良部島方言の動詞は、まず文末終止を行えるかどうかで、定動詞 (伝統的には終止形や連体形など) と副動詞 (接続形や中止形など) に分けることができる (表1参照)。m語尾終止形と連体終止形は定動詞の屈折形式の1つである。本稿では扱わないが、定動詞にはこれらのほかに、願望や意志など未来の行為に関するムードを表わす意志形 (例: *mi-di* 「見よう」)・希求形 (*mi-baa* 「見たい」)・命令形 (*mi-ru* 「見ろ」) がある。これらの形式はテンスの対立がない。

表 1. 伊良部島方言の動詞

		文末終止可能	テンスの対立
定動詞	連体終止形・m語尾終止形	+	+
	意志形・希求形・命令形	+	－
副動詞	接続形・条件形など	－	－

以下の表 2、表 3 に定動詞の屈折パラダイムを示す。注意すべき点が 5 つある。

- (4) 定動詞には肯定形（表 2）と否定形（表 3）があり、内部構造が異なる。
- (5) 過去テンス接辞 *-ta* (*r*) における (*r*) は、ムード接辞 *-m* (m語尾) の接続で脱落する (*-tar + -m > -ta-m*)。
- (6) 表 3 から明らかなように m語尾終止形には非過去の否定形がない。(7 節で後述)
- (7) 否定接辞の *-n* は、過去テンス接辞の */t/* に同化して *-t* として現れる。
- (8) Class 2 の動詞（語根末が子音の動詞）では、語幹と屈折接辞の間に語幹拡張母音 (stem extension；下地 2008) が生じることがある (*tur- + -n > tur.a-n*)。

表 2. 定動詞の屈折パラダイム：肯定形

形 式	Class 1 <i>mii</i> -「見る」		Class 2 <i>tur</i> -「取る」	
	非過去	過 去	非過去	過 去
連体終止形（語幹-テンス）	<i>mii-r</i>	<i>mii-tar</i>	<i>tur-Ø</i>	<i>tur-tar</i>
m語尾終止形（語幹-テンス-ムード）	<i>mii-r-m</i>	<i>mii-ta-m</i>	<i>tur-Ø-m</i>	<i>tur-ta-m</i>

表 3. 定動詞の屈折パラダイム：否定形

形 式	Class 1 <i>mii</i> -「見る」		Class 2 <i>tur</i> -「取る」	
	非過去	過 去	非過去	過 去
連体終止形（語幹-否定-テンス）	<i>mii-n-Ø</i>	<i>mii-t-tar</i>	<i>tur.a-n-Ø</i>	<i>tur.a-t-tar</i>
m語尾終止形（語幹-否定-テンス-ムード）		<i>mii-t-ta-m</i>		<i>tur.a-t-ta-m</i>

上記のように、定動詞の諸形式は文末終止の形式として範列的に対立するが、連体終止形はさらに連体修飾節の述語としても働くことができる。

形態論的に見ると、単純に語尾 1 つを取り換えて対立するというものではなく、m語尾終止形は 2 つの屈折語尾（テンス接辞・ムード接辞）を取るという変則的なものである。これは上述したように m語尾がかつて付属語であったことに起因する。

3. 2. m語尾終止形の-mの形態論的地位ー接辞か付属語か

m語尾終止形を作る-mは、本稿の分析ではムード接辞であり、その機能を4節以下で問題にする。接辞は単語の内部要素であるから、例えば*miir-m*「見る」はこれで1つの単語ということになる。しかし、*miir*自体で自立できる形（連体終止形）であり、しかも歴史的に見れば-mは付属語であった（それ自体が単語であった）のだから、*miir*と-mの間に語境界があるとする分析も考えられる（この分析の場合、*miir=m*）³。そうであれば、m語尾終止形は動詞の語形変化の1つではなく、完結した語形（連体終止形）に=*m*が付属語としてくっついているということになる（これはちょうど、日本語で「見る=だろう」における「=だろう」を「見る」の語形変化の一部としないことと同じである）。

しかし、-mを付属語とせず接辞とするのは以下の理由による。伊良部島方言において、ある形式が接辞か付属語かという問題は、①選択制限と②拘束形式への付属可能性によってほとんど解決できる（Shimoji 2008：126）。まず、接辞は①選択制限が強く、ほとんどの場合一種類の語幹にしか付属しない上、②拘束形式にも接続できる。一方、付属語（clitic）は本来、句を単位に接続するため①選択制限が弱く（すなわち名詞語幹や動詞語幹など多様な要素に接続可能であり）、②自由形式にしか接続しない⁴。上記の2点で、-mは明らかに接辞である。すなわち、①動詞語幹にしか接続せず、②拘束形式にも接続できる（*mi-ta-m*の*mi-ta*は拘束形式）。よって-mは接辞であり、m語尾終止形は動詞の1形式として考えることができる。

4. 本稿で用いる資料

表4に示すように、本稿のデータはすべて現地調査で録音したテキストデータを書き起こしてコーパス化したものを用いている。テキストは独話も会話もあるが、テキストジャンルとm語尾の出現頻度との間には興味深い相関関係があり、これについては6節で詳述する。表5に見るように、m語尾は延べ数で281例収集できた。

表4. 資料の基本情報

調査年	2005-2007年	
調査地	伊良部島（佐和田・長浜地区）	
協力者	男性2人	69歳、77歳
	女性4人	104歳、92歳、71歳、67歳
資料	自然談話8編（6節で詳述）	
総語数	11,351語	

表5. 資料に現れた動詞

	延べ語数	
副動詞類	843	33.2%
連体終止形	1,355	53.3%
m語尾終止形	281	11.1%
非定動詞類	62	2.4%
総計	2,541	100%

5. 資料におけるm語尾終止形の諸特徴

5.1. モダリティ標識との共起関係

動詞に後続するモダリティを表す付属語類について、連体終止形はさまざまな付属語類と共起し、明確な共起制限は見られないのに対し、m語尾終止形には共起しやすいものと、共起しにくいものがある。端的に言って、話者の確信を表すモダリティ標識類と共起しやすく、確信の度合いの低さを表す標識類（推量、自問、伝聞、疑問の標識類）とは共起しにくいことが分かった。

5.1.1. 話者の確信を表すモダリティ標識類

m語尾終止形は話者の確信や強調を表すモダリティ付属語 = *dooi* 「だよ」あるいは = *dara* 「でしょ」と高頻度で共起することが分かった（281例中142例）。

- (9) *nnama = a mii-n-Ø = suga, pav = mai juu u-ta-m = dooi nkjaan = na.*
 今 = TOP 見る-NEG-NPST = が 蛇 = も よく いる-PST-M = EMP 昔 = TOP
 「今は見ないけど、蛇もよくいたんだよ、昔は。」

ほかの宮古語でm語尾終止形がある方言では、常に確信・強調の = *doo* と共起する方言もあるという（平山・大島・中本1967、伊豆山2002）。

5.1.2. 話者の確信の度合いの低さを表すモダリティ標識類

m語尾終止形は話者の確信の低さを表す付属語類（推量 = *paz* 「だろう、かもしれない」、自問 = *bjaam* 「かなあ」とほとんど共起しないことが分かった。これらは談話資料には一定数生じているが（それぞれ92例、26例）、連体終止形に接続することがほとんどであった。以下に見るように、m語尾終止形と = *paz* との共起は1例のみ確認でき、 = *bjaam* との共起は全くなかった。

- (10) *ssa-n-Ø. aŷŷa-t-ta-m = paz.*
 知る-NEG-NPST 言う-NEG-PST-M = だろう
 「知らん。（私はそうは）言わなかったかも。」

伝聞標識も、話者が間接的に得た情報を表す点で、話者の確信の度合いの低さを示す標識であると考えることができる。伝聞標識 = *ca* はm語尾終止形と共起しない。この付属語は物語では文終止の際にはほぼ義務的に出現するほど多数出現する。その際、共起する動詞は常に連体終止形である。

- (11) *biki + vcca = a* *mai + par-tar = ca.* *tubi-i* *par-tar = ca.*
 オス + うずら = TOP 舞う + 去る-PST = とさ 飛ぶ-CVB.SEQ 去る-PST = とさ
 「オスうずらは飛び去ったそうだ。飛んでいったそうだ。」

疑問標識の機能は、基本的には話者自身が情報を持たない場合に聞き手に情報の提供を促すことである。特にYes/No疑問では、命題の真偽について話者の側に情報が無い。よって、話者の確信の度合いの低さを表すと考えてもよさそう。m語尾終止形は、疑問の付属語（Yes/No疑問文では=*ru*、Wh疑問文では=*ga*）とはほとんど共起せず、平叙文で使われる傾向がある。しかし、281例中22例で、Yes/no疑問の付属語を伴っていた（以下、同化により $-m + =ru > -m = mu$ ）。

- (12) *taru = mai* *juku-uha-t-ta-m = mu?* *jooko.*
 誰 = も 休む-CAUS-NEG-PST-M = Q ようこ
 「誰も（おまえを）休ませなかったか？ようこ（人名）」
- (13) A : *pataki = mai* *muci + u-tar?*
 畑 = も 持つ + PROG-PST
 「(当時は) 畑も持っていたの？」
- B : *un-nagi = n = na* *a-Ø-m = mu?*
 ところ-など = DAT = TOP ある-NPST-M = Q
 「当時はないよ」(lit. 「当時はあるだろうか?」)
- (14) A : *sjooka = tii = ja* *mmna* *naugara* *icinensjee = mai* *as-Ø = dara = i?*
 唱歌 = と = TOP みんな なんだっけ 一年生 = も する-NPST = EMP = ね
 「唱歌といえば、みんな、あの、一年生もした（歌った）んだよね？」
- B : *aai* *icinensjee = ja* *as-Ø-m = mu?*
 いや 一年生 = TOP する-NPST-M = Q
 「いいや、一年生はしないよ。」(lit. 「いいや、一年生はするだろうか?」)

(13)や(14)のように、m語尾終止形と共起する疑問標識はほとんどの場合疑問の力を持っておらず、いわゆる反語・修辞疑問として解釈できる。これはどういうことであろうか？

修辞疑問は、命題の偽への確信（negative assertion : Givón 1994）を表していると考えることができる。すなわち、命題内容が偽であることを承知の上で、あえてその真偽を問う形にするのである。このように、修辞疑問で話者がm語尾を使う際、話者は命題の偽について確信がある。5.1.1の結果と合わせて考えれば、m語尾終止形は、話者の確信（それが命題の真であれ偽であれ）を表す形式である、と考えたほうがよさそう⁵。

5.2. テンスとの関係

表6に示すように、m語尾終止形は、総じて非過去より過去時制で多く使われると言える。しかし、動作動詞類と状態動詞類の別で小計を出すと、状態動詞類では逆に非過去のほうに多く現れていることがわかる⁶。

表6. テンスとm語尾終止形

	非過去	過去
動作動詞類	22	174
状態動詞類	70	15
合計	92	189

以下の(15)は状態動詞の例である。

- (15) A : *vva = a* *njaa-n-Ø = dara = i*
 2SG = TOP ない-NEG-NPST = EMP = ね
 「あんたは（テレビ）ないよね。」
- B : *nau!* *a-Ø-m = dooi* *kuma = a* *ara-da = ju*
 なにを ある-NPST-M = EMP ここ = TOP COP-NEG.CVB = よ
 「なにを！あるよ。ここじゃなくて（他にあるんだ）よ。」

動作動詞類の非過去形は少ないが、出現する場合は、いま、まさに起こりつつある動作について述べる場合がほとんどである。

- (16) *kaja*, *kaja!* *pav-Ø-m = mju = ti*, *mii-tigaa...*
 あれ あれ 這う-NPST-M = EMP = と 見る-CVB.CND
 「あれ（見て）あれ（見て）！（赤ちゃんが）ハイハイするよ、と（いうので）、見たら」
- (17) *hai*, *pjaa = sii* *turi-Ø*. *kjaari-i* *par-Ø-m = ti = du* *asi + ur-Ø*.
 ほら 早い=で 取る-IMP 消える-CVB.SEQ 去る-NPST-M = と = FOC する+PROG-NPST
 「ほら、早く（お湯を）取れ。（沸騰して）消えてなくなろうとしている。」

ごく少数（3例）、動作動詞の非過去において、何かをリストアップする際に生じる例が見られた。

- (18) *aa = mai* *fau-Ø-m = doo*, *mata muz-nagi = mai* *as-Ø-m = doo*, *mata...*
 粟 = も 食べる-NPST-M = ? また 麦-など = も する-NPST-M = ? また
 「粟も食べるでしょう、また麦などもする（作る）でしょう、また…」

資料に見られた「リストアップ用法」では、すべてm語尾終止形 + = *doo* という構造で生じており、= *doo* は、おそらく強調の = *dooi* (5.1.1) に由来すると思われるが、共時的に強調の機能を持っているか不明であり、グロスとして「？」を振ってある。リストアップ用法はこれまで見てきたm語尾の機能（話者の確信）と無関係であるように見えるが、この-mをm語尾と別形態素として処理するかどうか、慎重に検討しなければならない。この問題については8節で論じる。

過去の場合は話者が実際に体験したか、あるいは話者が実際に目撃したことについて述べる例が典型的である（189例中132例）。しかし、実際に体験・目撃したことでなくても、自分の知識から確信が持てる場合にm語尾形式が使われることもある。

- (19) A : *zau = n = du* *mmna* *miz = nu* *ai-ba = du*.
 門 = DAT = FOC みんな 水 = NOM ある-CVB.CSL = EMP
 「門に水（のに入った桶）があるから（何かناと思って）。」
 B : *taru = mai* *sn-ta-m = dara* *karjuu = nu* *miz = tiï*.
 誰 = も 死ぬ-PST-M = EMP カリュウ = GEN 水 = と
 「（ということは）誰かが死んだんだよ。カリユウの水と（言ってね）。」

以上をまとめるならば、m語尾終止形は、①過去に実際に生じた事態か、②目の前で起こっているか、③これから起こることが目の前の状況から明かである場合について述べる場合がほとんどであるということである（「リストアップ用法」を除く；表7参照）。このことは明らかに、5.1で述べた事実すなわち、m語尾終止形が話者の確信を表すモダリティと共起しやすいことと関係していると言える。すなわち、いまだに生じていない未来の出来事よりも、①②③のような場合のほうが、出来事の生起に対する話者の確信が高くなるだろう。

表6. テンスとm語尾終止形（再掲）

	非過去	過 去
動 作 動 詞 類	22	174
状 態 動 詞 類	70	15
合 計	92	189

表7. テンスの意味による分類

	非過去	過 去
動 作 動 詞 類	③	①
状 態 動 詞 類	②	
合 計	92	189

5.3. 人称との関係

m語尾終止形は、1人称主語・3人称主語とよく共起し（それぞれ132例・136例）、2人称主語との共起は13例だけしか確認できなかった⁷。

- (20) *taru-gama!* *idi-i* *kuu-Ø=ti* *ažži-ba*,
 タル-DIM 出る-CVB.SEQ 来る-NPST.IMP = と 言う-CVB.CSL
aai! *vva=a* *vc-Ø-m=ti* *ba=a* *až-tar*.
 いや 2SG=TOP 打つ-NPST-M = と 1SG=TOP 言う-PST
 「『タル（愛称）！（トイレから）出てきなさい！』と（先生が）言うから、『いやだ！先生は（私を）たたくでしょう！』と私は言ったんだ。」

伊豆山（2002：62）も平良方言について同様の傾向を指摘している。伊豆山は、*m*語尾が話し手の判断を表す形式であって、聞き手のことは話し手よりも聞き手のほうがよく知っているのだから、*m*語尾を用いることはできない、と説明している。

5.4. 焦点化構文（係り結び）における振る舞い

m語尾終止形は決して係り結びの結びの形にならない。この事実は、のちの追跡面接調査でも確認できたことである。例えば以下で、動詞を連体終止形から*m*語尾終止形に変えることは出来ない。

- (21) *uri=u=baa* *cnu=du* *as-tar/*as-ta-m*.
 それ=ACC=TOP 昨日=FOC する-PST/*する-PST-M
 「それについては昨日やった。」

談話機能の点でいえば、係り結びにおいては文中の述語以外のある部分に焦点があり、述語は聞き手にとって前提となっている。よって、*m*語尾終止形が結びの形として出現できないという形式的な制限は、この形式が談話における前提を表すことができない、言い換えれば、常に新情報の提示の機能を持っている、というふうに説明できる。

この「新情報」という点についてももう少し詳しく検討してみたい。これまでの例を見ると、m語尾終止形を使う場合、話者は命題の真偽に関して確信を持っているだけでなく、命題の真偽に関して聞き手がどのような知識を持っているかについても考えているようだ。すなわち、聞き手が命題内容の真偽について知らない場合（e. g. (9)、(13)、(16)、(17)、(19)）や、聞き手の誤った前提を新しい情報で訂正する、という場合（e. g. (1)、(14)、(15)）に使われている。なお、調査中、ネイティブ話者はよくm語尾終止形が警告のニュアンスを含む（あまり丁寧でない）言い方である、と発表者に対して指摘していたが、聞き手が予期しない情報を提供したり、誤った前提を正したりするという特徴を考えれば、話者が「警告」というニュアンスを感じ取るのもうなずけることである。

6. テキストジャンルとの関係

5節において、m語尾終止形が話者の確信を積極的に表すこと、また聞き手にとっての新情報を提示していることを見た。この2つの特徴は、テキストのジャンルごとの分布特徴にも現れているだろうか？これは今後の研究課題であるが、以下に気づいた点を簡単にまとめておく。

表8に、m語尾終止形がどのようなテキストジャンルにどれだけ生じているかを示す。本稿で用いた8編のテキストはランダムに選んであり、m語尾終止形が生じているかどうかは問題にしていない。よって、m語尾終止形が1例もないN1-N2も含めてある。

表8. テキストジャンルとm語尾終止形 (N : Narrative, C : conversation)

テキストID	N1	N2	N3	N4	N5	N6	C1	C2	合計
内 容	物語	物語	物語	料理の 作り方	戦中の話	家族の話	家族	友人	
延 べ 語 数	344	662	403	528	2,098	2,022	2,203	3,090	11,351
a. 動詞延べ 語数	66	107	84	71	497	562	489	665	2,541
b. m語尾終止 形の延べ数	0	0	1	2	66	28	72	112	281
出現の割合 (b/a)	0%	0%	1.2%	2.8%	13.3%	5.0%	14.7%	16.8%	11.1%

表8に示したように、m語尾終止形はN1～N4において出現頻度が目立って低い（それぞれ出現頻度は3%未満）。これは、描かれる事態が伝聞・想像上の出来事（物語の場合）・一般事実（作り方の場合）であり、話者が現実には照らして確信を持って語ることと無縁だからではないかと推測できるが、今後より詳細な検討が必要である。独話のうち、話者の戦争中の体験を語るN5では、N1～N4に比べてm語尾終止形の出現頻度が格段にあがる（N3とN5は同一話者の語りなので特に興味深い）。これは、話者の過去の直接体験について語っているからと思われる。さらに、戦中のことを知らない聞き手（発表者）に対して、その当時のことを教えるという行為も、m語尾終止形の出現のしやすさに関連していると考えられる。会話ジャンルのC1-C2には、N5以上の頻度でm語尾終止形が出現する。m語尾終止形の重要な特徴である、聞き手にとっての新情報の提示は、話者と聞き手が交替する会話ジャンルでは会話参与者双方で生じる可能性があるため、単純に考えて独話ジャンルよりもm語尾終止形の使用が生じやすいと言えるかもしれないが、より詳細な分析を今後進める必要があるだろう。

7. m語尾終止形の非過去における否定形式の欠如について

m語尾終止形の機能がある程度わかってきたところで、この形式に非過去の否定形式が欠けている点（3.1の表3）を再考してみたい。(22)の連体終止形の非過去の否定を参考にすると、もしm語尾終止形に非過去の否定形があるとすれば、予測される形は(23)の①のようになると考えられる（②については後述する）。

(22) 連体終止形の非過去の否定

語幹	-否定	-テンス	実際に出来上がる形
<i>mii-</i>	<i>-n</i>	<i>-Ø</i>	<i>miin</i> 「見ない」
<i>tur.a-</i>	<i>-n</i>	<i>-Ø</i>	<i>turan</i> 「取らない」

(23) m語尾終止形の非過去の否定

語幹	-否定	-テンス	-m	予測される形①	予測される形②
<i>mii-</i>	<i>-n</i>	<i>-Ø</i>	<i>-m</i>	<i>miinm</i> （実際には見られず）	<i>miin</i>
<i>tur.a-</i>	<i>-n</i>	<i>-Ø</i>	<i>-m</i>	<i>turanm</i> （実際には見られず）	<i>turan</i>

(23)で、①のような**miinm*や**turanm*は実際には見られないため、発表者は、m語尾終止形の非過去否定の形は存在しないと見ている。しかし、もし-nに-mを接続した際に形態音韻的に-mが落ちるという現象があるとすれば、②のような形になると予測される。すなわち、(22)の基本形と同音の、非過去・否定のm語尾終止形が存在することも十分考えられる。すなわち、これまで単に連体終止形の否定形であると整理されてきた*miin*や*turan*の中には、

実は(23)の②のようなm語尾終止形の否定形があるかもしれない。しかし、以下のような理由から、このような議論は否定される。

伊良部島方言の形態音韻論で、/n/で終わる形式にm語尾が接続すると、脱落するのは/n/のほうである。

(24) *sn*-「死ぬ」+*-m*>*s-m*「死ぬ」(m語尾終止形)

よって、(23)の*n*+*m*において例外的に*-m*が脱落すると考えるのは非合理的である。

このような考察から、m語尾終止形は非過去において否定形式を欠くと解釈しなければならない。このような非過去・否定におけるm語尾終止形の欠如に対して注目すべき点は、過去の否定においてはm語尾が共起可能であるという点である。

(25) *mii-t-ta-m*

見る-NEG-NPST-M

「見なかった」

非過去では肯定形しかm語尾がなく、過去では肯定否定ともにm語尾があるという状況についてより一般化すれば、伊良部島方言ではテンス・肯定否定の区別が確信のムードの取り方に影響を与えているということである。通言語的に、テンスの区別が肯定否定・ムードの取り方に影響を与えるのは珍しくない (Palmer 1986; Payne 1997)。伊良部島方言で、確信のムードと非過去テンスおよび否定の相性が悪いのはなぜだろうか？

ある出来事が未来において生じない、と言及する場合(非過去の否定)よりも、ある出来事が確かに生じなかった、と言及する場合(過去の否定)のほうが、話者の確信は高いはずである。なぜなら、後者の場合、直接体験など、確かな情報ソースに頼ることが出来るからである。例えば、「その映画を見なかった」という表現は、実際に見ていなければ確実にそのように言えるし、その結果が変わることはない。一方、未来においてある出来事が生じないと言い切ることは難しい(「その映画を決して見ない」と言ったとしても、友人の強引な誘いで結局見るかもしれない)。

このように、筆者は現時点では、非過去の否定という意味的特徴そのものが、m語尾との共起を阻む要因であると見ている。しかし、この点についてはさらに他の方言の記述成果を見ながらの検証が必要であろう。例えば、周辺の方言で、非過去の否定のm語尾終止形が見つかれば、筆者の説は修正を余儀なくされるだろう。しかし筆者の知る限り、伊良部島のすべての方言(伊良部仲地、国仲、佐和田長浜、佐良浜)で、非過去の否定はm語尾と共起しない。

8. m語尾とリストアップ用法

5.2節において、m語尾の特殊な機能としてリストアップ用法を見た。以下の(26)はすでに見た(18)の再掲である。

- (26) *aa=mai* *fau-Ø-m=doo*, *mata muz-nagi=mai as-Ø-m=doo*, *mata...*
 粟=も 食べる-NPST-M=? また 麦-など=も する-NPST-M=? また
 「粟も食べるでしょう、また麦などもする（作る）でしょう、また…」
- (27) *bakamunu ja-tigaa mmja ganzuu-sa=mai*
 若者 COP-CVB.CND もう 健康である-NLZ=も
a-Ø-m=doo, pataraki-ba zin=mai a-Ø-m=doo...
 ある-NPST-M=? 働く-CVB.CSL 金=も ある-NPST-M=?
 「若者だったら、健康もあるし（=健康でもあるし）、働くから金もあるし…」

これまで見てきたm語尾の機能－話者の確信と聞き手にとっての新情報－に照らせば、リストアップ用法は例外的な用法であるように見える。あるいはこの-mがm語尾と共時的には別形態素であると処理する記述も考えられる。

しかし田窪行則氏（私信）によると、リストアップ用法をm語尾の2つの機能に関連付けて考えることが可能であるという。まず、これまで見てきたm語尾の2つの機能は、聞き手に新しい知識をアップデートする機能を持っている。例えば(15)では聞き手の誤った前提知識を正しい情報でアップデートし、(19)では前提知識を持たない聞き手に対して新しい情報を加えることで聞き手の知識をアップデートしている。ここでリストアップ用法に立ち戻ってみると、この用法もまた、聞き手に対して、新しい情報を付け加えていっていると考えられそうである。リストアップ用法は話者の確信というモーダルな機能は持っていないが、聞き手の知識をアップデートするという談話的・情報構造的な機能を持っていると考えられるのである。

よって筆者はリストアップ用法をm語尾の機能のひとつとして分析すべきであると提案する。

9. おわりに

本稿では、m語尾終止形が【話者の確信】と【聞き手にとっての新情報】を標示していると結論づける。言語類型論的に見ると、m語尾終止形の【話者の確信】という機能は、validationality（ケチュア語についてWeber 1986、ツングース諸語についてMalchukov 2000）あるいは「確信法」（チュルク諸語のうちサハ語について江畑2006）と呼ばれる認識モダリティに類似している。さらに一般化すれば、命題の真偽判断への積極的な関与と

いう点で、realisモダリティの一種と見ることができる (Akatsuka 1985、Elliot 2000)。

一方、m語尾終止形のもうひとつの特徴である【聞き手にとっての新情報】は、話者と聞き手の両方を考慮する必要がある。この点で、伝統的な「話者中心の」認識モダリティ論、言い換えれば命題の真偽判断中心の認識モダリティ論 (例えばAkatsuka 1985) に対して興味深い例を提示していると言える。Givón (1994: 269) は、認識モダリティ論がこれまで話者中心の (意味論的な) ものであったとしたうえで、聞き手中心の社会交渉的 (語用論的) な観点も考慮する必要があると述べている。8節で述べたm語尾のリストアップ用法もまた、この聞き手という視点を導入してこそ説明が可能である。

最後に、本稿の結果から浮かび上がってくる問題点を指摘しておく。まず、m語尾終止形が話者の確信を表わすのだとすれば、実際に出来事が起こった (あるいは起こらなかった) ことを確かめられる過去との相性がよいはずであり、伊良部島方言ではそれが確かに傾向として見られるが、他の方言では、非過去に限って見られるという (狩俣1997)。これらの方言では、もともと過去にも非過去にもあったm語尾終止形が、過去形においてなくなってしまうと見たほうが合理的であるが、なぜ、m語尾とよく共起していたはずの過去形から先になくなってしまったのだろうか？

次の問題点は各方言におけるm語尾の機能に違いがあるかどうかという点である。宮古語の祖語の段階で、m語尾終止形が伊良部島方言のように【話者の確信】と【聞き手にとっての新情報】の表示をしていたと仮定すれば、そのうちのいずれかの機能を一次的なものとして使うようになる方言も出てくると考えられる。【聞き手にとっての新情報】に特化するような方言が出てくれば、例えば、目の前で生じつつある (聞き手が気付かない) 事態への警告といった機能に特化する方言が出てきても不思議ではない。事実、伊豆山 (2002: 61-67) の平良方言の例を見る限り、平良方言では警告の機能が全面に出ているようである。今後、宮古語の諸方言のm語尾終止形の機能を精査しなおし、非過去にのみm語尾終止形を持つ方言ではどのような機能があるのかを調べる必要がある。それによって、m語尾の機能の通時的变化の道筋や、m語尾終止形が共時的にかなり異なった分布や機能を持つ方言を統一的に説明することができるだろう。

注

- ¹ 本稿は2009年6月28日に開かれた日本言語学会および2009年7月5日に開かれた沖縄言語研究センター総会の発表原稿に加筆修正を加えたものである。これらの学会・研究会でコメント・アドバイスを下さった先生方（上山あゆみ先生、加藤重広先生、狩俣繁久先生、田窪行則先生、柴崎礼士郎先生、西岡敏先生）に感謝申し上げる。
- ² 本稿の例文は、断わりのない限り伊良部島方言（そのうち佐和田・長浜方言）のものをを用いる。さらに、表記はShimoji（2008）の音韻表記を用いる（p, t, k, b, d, g, f, v, s, c [ts], z [dz], m, n, ŋ [z], r [r/], w, j, a, e, i, o, u）。長音は短音素の連続と解釈する。摩擦音は語末の際、および子音が後続する際に、同一調音位置の接近音が聞かれることがあるが（*kaf* [kaf^ʰ]「書く」、*kaftar* [kaf^ʰ ta]「書いた」）、これは音声的なものであり、そこに母音音素（伝統的には母音/?/ないし/u/）を立てないものとする。
- ³ 本稿では、接辞境界を-で、付属語境界を=で標示する。
- ⁴ たとえば日本語の「=だろう」は、①名詞にも動詞にも接続し、かつ②自由形式にしか接続しないので、典型的な付属語である。
- ⁵ ここで他の言語に目を向けると、ツングース諸語に、伊良部島方言のm語尾終止形とよく似た振る舞いをする動詞がある。それは断定形（*validation*al）と呼ばれる形式であり、まずその名前から、m語尾終止形の「話者の確信」に類似した機能を持っていることが分かる（Malchukov 2000：452）。興味深いことに、この形式は疑問文で使われる際に反語としての力を持つことがあるという（風間2005）。さらに、6節でみるように、伊良部島方言のm語尾終止形は独話よりも会話において頻出するが、この傾向はツングース諸語の断定形にも見られるという（前掲書）。
- ⁶ 状態動詞類とは形容詞語幹から派生された動詞（e.g. *taka-ka-m*「高かった」）や、状態動詞*u-m/a-m*「いる/ある」などを指す。動作動詞と状態動詞が複合して進行相を表す場合、状態動詞類に含める（e.g. (1)）。
- ⁷ 主語名詞句が実際に現れていなくても、文脈から主語を復元したうえでカウントした。

参考文献（アルファベット順）

- Akatsuka, Noriko. 1985. Conditionals and the epistemic scale. *Language* 61 (3): 625-639.
- 江畑冬生 2006。「サハ語」中山俊秀・江畑冬生（編）『文法を描く1』東京：ILCAA.
- Elliott, Jennifer, R. 2000. Realis and irrealis: forms and concepts of the grammaticalization of reality. *Linguistic typology* 4 (1): 55-90.
- Givón, Talmy. 1994. Irrealis and the subjunctive. *Studies in language* 18 (2): 265-337.
- 林 由華 2007。「琉球語宮古池間方言における未来を表わす形式について」未刊行修士論文、京都大学。

- 平山輝男・大島一郎・中本正智 1967。『琉球先島方言の総合的研究』東京：明治書院。
- 伊豆山敦子 2002。「琉球・宮古（平良方言の文法基礎研究）『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究(2)「環太平洋の言語」日本班成果報告A 4-012)』。
- 狩俣繁久 1997 [1992]。「宮古方言亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典セレクション 日本列島の言語』、388-403、東京：三省堂。
- 狩俣繁久 1999。「宮古諸方言の動詞「終止形」の成立について」『日本東洋文化論集』5：27-51。
- 風間伸次郎 2005。「ナーナイ語の疑問詞による反語表現について」津曲敏郎（編）『環北太平洋の言語』、129-163、札幌：北海道大学大学院文学研究科。
- Malchukov, Andrej. N. 2000. Perfect, evidentiality and related categories in Tungusic languages. In Johanson, Lars. and Bo Utas, eds., *Evidentials: Turkic, Iranian and neighbouring languages*, 441-470, Berlin; New York: Mouton de Gruyter.
- 仲宗根政善 1961。「琉球方言概説」遠藤嘉基等（編）『方言学講座』第四卷。
- 名嘉真三成 1992。『琉球方言の古層』東京：第一書房。
- 中本正智 1990。『日本列島言語史の研究』東京：大修館書店。
- Palmer, Frank R. 1986. *Mood and modality*. Cambridge: CUP.
- Payne, Thomas E. 1997. *Describing morphosyntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 下地理則 2008。「伊良部島方言の動詞屈折形態論」『琉球の方言』32：69-114。
- Shimoji, Michinori. 2008. *A grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan language*. A PhD thesis, the Australian National University.
- 内間直仁 1984。『琉球方言の文法の研究』笠間書店。
- Weber, David J. 1986. Information perspective, profile and patterns in Quechua. In Chafe, Wallace, and Johanna Nichols, eds., *Evidentiality: the linguistic encoding of epistemology*, 137-55, New York: Ablex.